

川越街道ウォーク【Ⅲ】和光市駅から新座駅まで

計画

歩行距離 約8.3km

集合場所 東武東上線和光市駅改札口

集合時間 午前10時

第3回 和光市駅から新座駅

実施日 2019(R01)年5月15日(水) 天候 晴

参加者 折本 文夫、前北 勝司、中田 信義、相原 教男、伊藤 泰弘、杉田 勝行、宇山 治男、
中島 征雄 計 8名

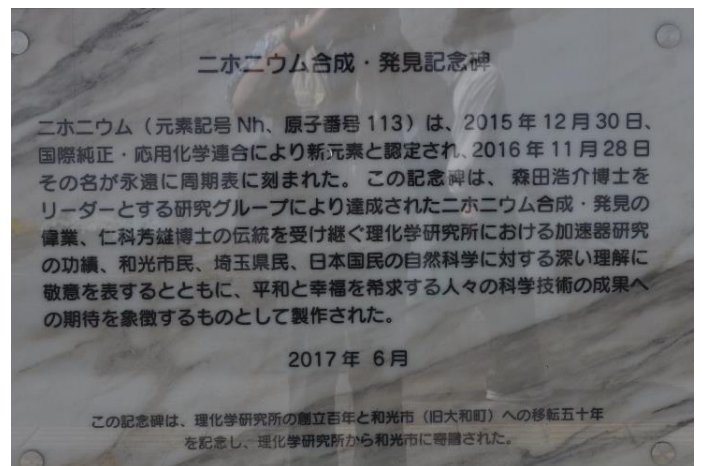
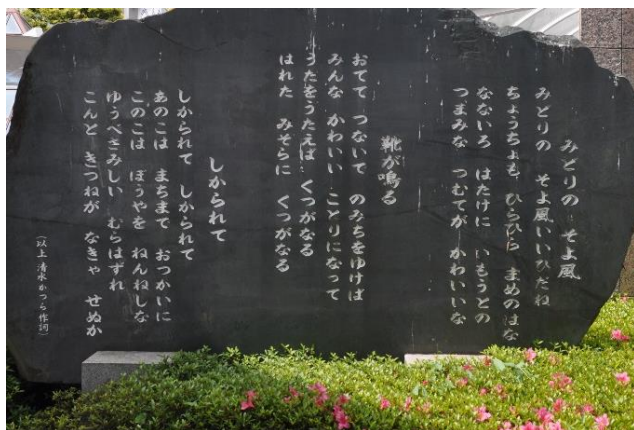
GPSデータ

歩行距離: 8.2km。全体所要時間: 2時間46分。移動時間: 2時間08分。停止時間: 38分。

移動平均速度: 3.9km/h。全体平均速度: 2.96/km/h。 累計歩行距離: 27.5km



和光市駅前に「清水かつら」の童謡が彫られた石碑と「ニホニウム合成・発見記念碑」がある。





9時55分、和光市駅南口広場を出発。ローソンを左に、約500m程で国道109号線川越街道に出る。



和光市駅入口交差点を右折し進む。道は下りとなり、本町小学校前信交差点の先で県道から分かれて右斜めの道を入るのが300m程の旧街道である。



小橋を渡り上り坂となり県道と合流する。(10:17) 10分位進んだ朝霞中央公園入口交差点を右に100m入ると中央公園があり、休憩するため立ち寄る。(10:30~35)





次の信号交差点（西松屋の看板がある幸町三丁目）の先で左に曲がる県道と分かれ、街道は直進する旧道を進む。道は急な下りとなり、途中左側に「膝折不動尊」がある。（10:49）



この急坂を昔は一人では荷車を引き上げるのが難しく、坂下に荷車の後押しの人夫がいたという。そのため、いつからか「かせぎ坂」と呼ばれるようになったという。急坂が終わる辺りでは前方に富士山が遠望できる。今日は残念ながら見えない。





坂を下り県道と合流した辺りから「膝折宿」が始まり、黒目川の手前辺りで終わる。「膝折」の名は、賊に追われた小栗助重（15世紀の武士でのち画僧で小栗判官のモデルとされる）が鬼鹿毛という名の馬に乗って当地まで逃れてきたところ、鬼鹿毛が膝を折って死んだことに由来すると伝えられる。県道との合流から100m程の右に「並流山 一乗院」の院号石柱があり、その奥に「一乗院（朝霞観音）」がある。（10:53）



一乗院の創建年代は不明ですが、高麗郡が設置された霊亀二年(716)のあと、戦乱があつて、戦乱を逃れた高麗氏が創建、観音寺と呼ばれていたという。



一乗院 『新編武蔵風土記稿』による縁起

（膝折宿） 一乗院

除地二畝五歩、宿の中北側にあり、真言宗新義豊嶋郡石神井村三寶寺末、並流山観音寺「一名平寺」と號す。本堂七間に五間、本尊十一面観音を安置す。開山の年歴等はすべて傳はらず、ただ口碑に傳へたるは、此村は、開關の頃高麗氏の開基なりと云へり、三寶寺末寺となりしは、宝曆六年十二月十二日、住僧宥巖法

印なりとす。

稲荷社。本堂の前にあり。

古碑。是も本堂の前にあり、元弘の二字ほのかに見ゆ。その餘は滅してよむべからず。

「朝霞市史」による縁起

膝折地区・一乗院並流山一乗院平等寺といい、宗旨は真言宗智山派で、本尊は十一面観音である。近世においては石神井三寶寺の末寺であったが、現在では京都の大本山智積院の直末となっている。由緒等は詳らかでないが、『風土記稿』によれば並流山観音寺、一名を平等寺とするとあり、口碑に従うと断つたうえで、開基は膝折地区を開いた高麗氏であるとしている。また、寺伝によれば、高麗氏の城が陥落した際、五名の家臣が膝折に落ち延びて来て住むようになり、膝折を開いたとし、と同時に乱世が平和に立ち返らんことと、人々の後世と菩提とを祈念して、一字を建立したともある。そして、本尊として十一面観音を都より勧請したことから観音寺と称したといい、その後は南北朝の初期に宇治醍醐山の尊師によって本堂が建てられたとも伝えている。具体的な創建年については、文和年間(1352~56)頃からの板碑が多数出土していることや、『朝霞市史通史編』でも「元弘年間(1331~33)までは遡らない」としていることから、今のところ南北朝とするのが適切かと思われる。

古くは本堂左手に大日堂、右手に地蔵堂を配し、豊臣秀吉の命によって稲荷社を設けていたともいう。そして、少なくとも近世に入ってから本堂は一度、本尊ともども焼失を受け、さらに安政年間(1854~59)にも火災に見舞われ、客殿・大日堂を失ったとされている。そして、この折、新たに本尊を造頭し、客殿を再建した。現在ある本堂は、焼失後に再建したのを解体し、やや北側へ移建したもので、昭和三十九年竣工によっている。また、庫裏は昭和二年に増築をみ、昭和五十五年に現状のように完成した。一方、西方には下寺とも呼んだ持明院を有していた。持明院については、『風土記稿』にもその記載があるが、正式には瑠璃光山持明院といい、本尊は坐像の薬師如来であった。ただし、その由緒等は全く詳らかでない。持明院は早くから衰退し、当寺の兼務するところとなっていたようである。なお、明治になってからは、第一小学校の前身である膝折小学校が置かれ、旧役場としても使われていた時代がある。

境内掲示による縁起

一乗院略縁起

当山は山号を並流山、院号を一乗院、寺号を平等寺としようする。弘法大師空海上人によって平安時代に立教開宗された真言密教の法燈を斟み、京都東山の智積院を総本山とし、成田山新勝寺、川崎大師平間寺、高尾山薬王院の三大本山と、全国三千ヶ寺に及ぶ寺院を以て組織される真言宗智山派に属する寺院である。御本尊様は、十一面観音菩薩で、御頭が十一の面からなり、あらゆる方向に顔を向けて苦しむ衆生を見逃すことなく救ってくれるという誓願を戴く仏様である。

門闢は寺伝によると「古来人ニ依ッテ成ル」とされ、「七一六年(霊亀二年)駿河、甲斐、相模、上総、下総、常陸、下野ノ七国ノ高麗人、一、七九九人ガ武蔵国(現在の入間付近)ニ移住シ、高麗郡ガ置カレタ。ソノ後戦乱アリテ高麗ノ城陥レリ時、主将某ハ敵ノ為ニ討レ畢ヌ。家臣五人遁レテ落人トナリ此ノ膝折ノ地ヘ來レリ、其頃ハ只原野ナリ。彼ノ五人ノ者カヲ合ワセテ遂ニ家ヲ作り居住ノ地トセリ、高麗氏ヲ家號トセル者アリ、ソノ時乱世ノ平和ニ立チ還エル事ヲコイ希イ、且世ノ人々ノ後世ト縁者ノ菩提ヲ願イテ守リ本尊タル十一面観世音菩薩ヲ勧請安置シー宇ヲ建立ス」というのが起源とされ当時は観音寺と呼ばれていた。

その後星移り物替わって南北朝時代の初期に宇治の尊師に依って間口七間奥行五間の本堂が建立された。[現在の寺域よりも東北百米の地で板碑百四十基が点在した場所、因に板碑は、一三五〇年(元和三年)より一四八〇年(文明一二年)が現存] 序で本堂前に稲荷社を配し右手に地蔵堂、左手に大日堂が安置された。更に西に持明院を有し、その奥手に阿弥陀堂(現在の閻魔の堂)が建立された。安政年間(一八一七年頃)に二度に亘って火災に遭遇し客殿、大日堂等を焼失する。現在の山容は大戦後照興(中興)に依って定まる。

一乗院所蔵の文化財

板石塔婆

板石塔婆は、中世に造られた供養塔の一種で、板碑とも呼ばれている。一乗院には、昭和二十六年から二十七年にかけて、境内墓地斜面から出土した。南北朝時代から室町時代までの百九十五基が収蔵されている。
(朝霞市教育委員会掲示)

街道を進みローソンの先に「高麗」の表札の住宅があり、その先右手に屋根が金属板で覆われた大きな住居がある。「**膝折宿脇本陣村田屋（高麗家）**」である。(11:07)



高麗家住宅（膝折宿 脇本陣）

朝霞市膝折町は室町時代からの古い宿場と伝えられ、江戸時代末には旧川越街道の宿場として民家が建ち並び、特産品を売る市も立ち、この地方の商業の中心地として栄えた場所です。

高麗家は、この膝折宿の中心部に位置し、屋号を「村田屋」と称して旅籠を営んでいました。

建物の建設年代は、建築様式などの特徴から18世紀末期の安永～天明期（1772年～1789年）頃と推定され、現在でも当時の旅籠の建築様式が残されており、川越街道膝折宿の面影が残る貴重な建物です。

朝霞市

その先左手にある膝折郵便局あたりが「**膝折宿本陣跡（牛山家）**」である。



街道は膝折町一丁目交差点（5差路）で左折するが、斜め右の道の先に「**一乗院閻魔堂（旧持明院下寺）**」に寄る。膝折町一丁目信号から100m弱、左手に八角の「**閻魔堂**」がある。(11:15)



一乗院閻魔堂の縁起（新編武蔵風土記稿より）

境内年貢地、十六間四方、一乗院の西にあり、真言宗新義にて、是も三宝寺末寺なり、瑠璃光山と號す、本堂五間半に三間半、フォン損は薬師の坐像にて、長二尺あり、是も開山の年歴等すべて詳ならず。

大日堂境内にあり、五間四方の堂なり。

朝霞市史による閻魔堂縁起

膝折地区・閻魔堂

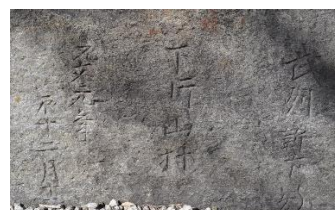
現在、この堂庵は閻魔堂あるいは下寺と通称されており、本来的には膝折下の旧戸の墓所に関わる三昧堂的な堂庵であったといえる。由緒等は詳らかでないが、元禄七（一六九四）年創建との伝えもある。正式に一乗寺管轄となったのは昭和十七年のことである。

ところで、もともとこれは閻魔堂ではなく阿弥陀堂であったとして良いかと思われる。というのも、『風土記稿』には阿弥陀堂の記事として「持明院ノ西膝折ノ下ト云所ニアリ・・・本尊ノ外観音閻魔等ノ木像ヲ安ス 側ニ寮アリ堂守ノ僧コレニ居ル」とあり、早くに持明院が零落かつ本尊もどれだかわからなくなった結果、安置していた閻魔様を代名詞的に捉えるようになり、ついには閻魔堂と呼ぶにいたったかと推察されるからである。現に『明細帳』では閻魔堂の記載はまったくなく、阿弥陀堂のことならば字北浦を所在地とし、宗旨を真言宗、本尊を阿弥陀如来、信徒を六十一人、村持ちとするとある。つまり、閻魔同というようになったのは近代に入ってからで、そうそう古いことではないと窺えるが、惜しむらくは、今となつてはそのあたりの経緯が知りえないことである。現状として伝えることは、かつては閻魔堂と薬師堂の二棟があったが、古くなったので取り壊し、八角堂一棟に造り変えた。そして、なかには閻魔像と薬師様、馬頭観音にショウヅカ婆さん、それに大日様を祀ったということである。このうち、馬頭観音は以前からあったが、大日様はどこからか、あとから持ってきたものだという。また、旧薬師堂には「め」と書いた額が多数奉納してあり、それが持明院という寺と関係していたようだともいっている。このことは「風土記稿」に、持明院の本尊を「薬師ノ坐像」と記してあることや、持明院の境内に大日堂があると述べていることと共に接点をみたようで、さらなる今後の考究が必要とされるところであろう。

信号に戻り、県道109号線を横切って進み、黒目川を大橋で渡る。



膝折三丁目交差点を過ぎると道は右にカーブすると三叉路があり、左右の道の上に小さな「庚申塔」がある。下の台に「武州新口郷 下口山村元文元年(1736)辰十二月」と刻まれている。





三叉路の左の「たびやの坂」と呼ばれる急坂を登って行く。右の坂道は「合同坂」という。住宅地の中を登って行くと台地上に出、県道109号線に合流する。5・60m先の野火止下交差点手前左側に「横町の六地藏」が祀られている。享保十七年(1732)銘の六地藏のほかに、左手に宝暦六年(1756)銘の青面金剛庚申塔、右手に正徳四年(1714)銘の地藏菩薩が並んでいる。(11:35)





横町の六地藏

川越街道沿いには、様々な石仏・石碑が、堂や、道筋に残り、人々の信仰や、生活の様子を今に伝えています。

横町の六地藏は、享保十七年(1732)に造立された六体の地藏菩薩の丸彫立像です。

地藏菩薩は、弥勒仏が現れるまでの間、六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上界)に迷い転ずる人々を救う菩薩として、古くから信仰され、親しまれてきました。

袈裟をまとった僧侶の姿に、それぞれ、錫杖や、宝珠、香炉等を持ち、合掌をし、六つの分身となって、街道沿いの人々を見守っています。

ここには、他に、正徳四年(1714)に造られた地藏菩薩の立像や、宝暦六年(1756)銘の刻まれた庚申塔が、あります。

平成八年三月

新座市教育委員会

新座市文化財保護審議委員会

直ぐ先の野火止下交差点を右折し、230・40m行き、右折して100mの右に「いずみ公園」があり、トイレ・ベンチがある。ここで昼食とする。(11:43~12:09)



先程の交差点に戻り、県道109号線を進む。350m程の野火止大門交差点は、左折して1.5km先に「平林寺」がある。交差点の西角に「金鳳山 平林禅寺」と彫られた大きな「寺号石」がある。道の向かいに広い庭で見事な茅葺の家がある。





県道を進み、JR 武蔵野線のガードを潜り、2つ目の信号を左折し、ガードを潜って右折し、JR 武蔵野線新座駅には12時41分に着いた。



今日はここまで。

前回第2回を欠席された杉田さんは、5月3日に一人で歩かれたそうです。

掲出の写真は今日5月15日のものと、昨年11月23日に下見したときのものを使いました。